〈論　文〉

死生観形成における絵本の役割に関する考察

植田 美津恵・山本 直子

Abstract

Of the 61 picture books in the so-called “classic picture books,” only “Suho’s White Horse” addressed death squarely. Japanese picture books are often rewritten with scenes of death and cruelty, the reason for this may be the influence of the education policy since the Meiji period and the involvement of the national character of Japanese people. From the 1970s, the number of picture books on the theme of death increased, and it is assumed that this was due to the increase in the number of suicides after the collapse of the bubble economy. Also there was also a murder in which an elementary school student was the perpetrator. Recently, while the number of suicides decreasing, especially the number of suicides young people increasing tendency, which increased the need to teach the importance of life in educational settings.

The role of picture books in shaping one’s view of life and death was discussed by highlighting the similarities between “The Cat Who Lived a Million Times” were published in 1977 and have been long-time sellers.and “Suho’s White Horse,”

Key Words: picture books, view of life and death, rewritten

1.はじめに

我々の死生観は、いつ頃から形成しはじめるのだろうか。

先行研究においては、すでに幼児期から児童期にかけて死生観は成立しているといわれる[1)]。

初期の研究として、ハンガリーの Maria　H　Nagy が、子どもには発達段階によって死の受け止め方に違いがあるという研究結果を 1984 年に発表している。Nagy によれば、3 歳から 5 歳までは、死を取り返しのつかない現象としてとらえることができず、死んだペットと電池が切れて動かなくなったおもちゃとを同じ感覚で受け止める。5 歳～9 歳ごろになると、人は死んだら決して生き返らないという認識はできるが、身近な人も含めてすべての人に死が訪れるということはわからない。死の普遍性と絶対性を受け入れるようになるのは 10 歳を過ぎた頃だという[2)]。

我々が口にする死生観と、言葉や概念の発達が未熟な幼児期のそれが同じであるとはいえないにしろ、死に対する情緒の芽は無意識ながらも意外に早い時期に形づくられるといっていいだろう。

乳幼児期を含め、人間の発達段階には個人差があることが前提であるが、死生観の萌芽期に相当する幼児期に出会う絵本の影響は決して小さくはない。では、我々はこれまでどんな絵本を読み、絵本の中で繰り広げられる生や死と出会ってきたのだろうか。その点を明確にする試みは、死生観形成における絵本の役割を浮き彫りにするとともに、絵本への期待を抱

かせ、絵本を選ぶ際の参考になると考えられる。

2. 目的と方法

そこで、本研究では、長い間幼児に読まれてきた（あるいは読み聞かせによって触れた）古典的絵本を取り上げ、その中で死を取り上げた絵本について論じる。次に、比較的近年に発表された絵本に着目し、その中で描かれる死を取り上げ、両者を多角的に分析し共通点を見出す取り組みを行う。その結果をもとに、幼児期に触れる、望ましい絵本の条件について論考する。

3. 古典的絵本の選定

3－1.絵本の選定条件

今回、古典的絵本として位置付けるにふさわしい絵本を選定する条件として、

1）長く読み継がれているもの

2）絵本の対象年齢が幼児期～小学初級・中級に設定されているもの

の 2 点をあげた。

古典的絵本の定義として、まずは長く読み継がれているものとしたい。昔に出版されていても、読み継がれないもの忘れ去られたものは数多くある。逆に、今でも俎上にあがるものは、それだけ社会や多くの人に受け入れられ、場合によっては親から子にわたる 2 世代、あるいは 3 世代にわたって読まれていると思われ、個々の死生観を形づくるにあたり何等かの影響を与え続けてきたと考えられる。

1）と 2）の条件を満たす絵本として、今回は松岡享子氏の著書『えほんのせかい　こどものせかい』に登場する 61 冊を取り上げることとする。

『えほんのせかい　こどものせかい』は、福音館書店が毎月の折り込み付録に掲載した文章をまとめたものを児童図書研究会が 2 度にわたって出版。その後松岡氏が主催する東京子ども図書館から小冊子として 6600 部が刊行され、1987 年には日本エディタースクール出版部から単行本として出版された。24 刷まで版を重ねたのち、2017 年に文藝春秋社から文庫本として刊行され今に至るという、この本こそが長く読み継がれてきた歴史を持つ[3)]。

今回の文庫化にあたって、松岡氏は以下のように述べている。

「当時の若いお母さんに向けて書いたこの本を今の若いお母さんがどんなふうに読むかわからないけれど、今、わたしが若いお母さんたちに何かお話しするとしても、まったく同じことを、同じことばで申し上げるだろうと思いました」[4)]

松岡氏のぶれない信念がうかがえる言葉である。

本書は 2017 年に文庫本となったことを機に、冒頭には松岡氏が運営する東京こども図書館や松岡氏の近影のカラー写真が複数掲載されている。続いて「子どもに読み継がれた絵本たち」のタイトルで、本書で紹介された絵本のうち数点が抜粋されている。いずれもカラー写真で、そのなかのひとつ『ちびくろさんぼ』は、日本語版と原書版が表紙と見開きでそれぞれ比較できる形を取り、両者の違いがひとめでわかるようになっている。

本書は、「子どもを本の世界に招きいれるために」の章からはじまり、子どもにとって絵本との出会いがいかに大切であるかということや、長く読み継がれている絵本の持つ価値などが書かれている。また、絵本のよしあしを見極める目を持つこと、絵本の時代は心を育

てる時代であることなど、絵本が子どもの情緒の発育と安定をもたらす優れたツールであることが示されている。

次章の「新しい経験としてのおはなし」では、子どもはおはなしの中に、精神の冒険を求めていること、昔話から学ぶことは多くあること、子どもが共感できるテーマと題材を選ぶこと、などが説かれている。

付録部分には「掲出図書一覧」として、本書で紹介したすべての絵本 61 冊のリストがあがっている。残りのページは、「えほんのせかい　こどものせかい　履歴書」と題し、本書が織り込み付録から誕生し、文庫本にいたるまでの歴史が書かれ、最後に文庫版にあたっての加筆部分がある。加筆部分では、近年のスマホに代表される電子機器の普及によって起こっている子どもたちへの過度な影響を危惧するとともに、子どもがすぐれた絵本と接する機会を失うことのないよう、その願いをすべての大人に託す気持ちを著している。

3-3.古典的絵本の概要と「スーホーの白い馬」

『えほんのせかい　こどものせかい』で紹介された合計 61 冊の出版年代別内訳は、1950 年代が 7 冊、‘60 年代 25 冊、‘70 年代 17 冊、‘80 年代が 2 冊であり、半数が 60 年以上前に出版されたものであった。また、「死」が物語の展開上重要なモチーフとなっているものは、『スーホーの白い馬』のみであった。

そのストーリーを以下に紹介する。

本書は、モンゴルの馬頭琴という楽器の由来の物語である。

ある日、貧しいひつじかいのスーホーは、道端で倒れている白い子馬を見つけて家に連れて帰り大切に育てる。数年後、殿様が競馬大会を開き、一等になった者に自分の娘と結婚させるというしらせが伝わってきた。青年となったスーホーは美しく立派に育った白い馬に乗って競馬に参加する。見事優勝するものの、貧しいスーホーを気に入らない殿様は、スーホーに 3 枚の銀貨を渡すとともに、馬を寄こせと乱暴に命じる。スーホーがその命令に従わなかったところ、殿様の家来たちに襲われ馬を奪われてしまう。傷ついたスーホーは無事逃げ帰るが、馬を奪われた悲しみは深かった。ある日、白い馬をみせびらかしたくて仕方のない殿様は、酒盛りを開いて皆に見せてやることにした。ところが、殿様が馬にまたがった途端、白い馬は恐ろしい勢いで跳ね上がり、殿様は地面に転げ落ちてしまう。怒った殿様は「あいつを捕まえろ！捕まらないなら、弓で射殺してしまえ！」と叫ぶと、家来たちは一斉に弓を放った。白い馬は、矢が何本も突き刺さり、酷い傷を負った姿でスーホーの家まで走って走ってたどり着く。再会の喜びもつかの間、馬は翌日死んでしまう。スーホーは悲しみのあまり眠れない日々が続く。

ある晩、ようやく眠りについたスーホーの夢の中に白い馬が出てきて、自分の死体の皮やすじや骨を使って楽器を作るよう、スーホーに告げる。その夢の通りに作った楽器、それが馬頭琴である。

以上が、『スーホーの白い馬』の内容である。

『スーホーの白い馬』の表紙は、小さな白い馬を抱くスーホーの絵が描かれ、下方にタイトルと大塚勇三再話・赤羽末吉画とある。表紙をめくると、モンゴル民話と付記されており、もともとは異国の民話であることがわかる。

最初のページは以下ではじまる。

「中国の北のほう、モンゴルには、ひろい草原がひろがり、
そこに住む人たちは、むかしから、ひつじや、牛や、馬などを
かっていました。このモンゴルに、馬頭琴という、がっきがあります。
がっきのいちばん上が、馬のあたまのかたちをしているので、
ばとうきんというのです。けれど、どうしてこういう、
がっきができたのでしょう？
それには、こんな話があるのです」

最初の馬頭琴は漢字で書かれ、すべての漢字にはルビが振られている。絵は、見開きいっぱいの草原とその上にかかる大きな虹。日本とは違う国の風景に、目を奪われる。

生まれたばかりの白い馬を拾ってきたスーホー。「スーホーは心をこめてせわしたおかげで、子馬はりっぱにそだちました」の文に、白い馬を慈しむスーホーの絵が画かれている。大切に育てることと生きること、それを示す絵に心が和む。

競馬の場面では、スーホーの白い馬が先頭を切って草原を走る姿が描かれる。白い馬も後に続く馬たちも小さめに画かれているため、草原とその上にやや日が暮れかかっているかのように広がる淡いピンク色の空がとてつもなく大きく見え、異国の大地の新鮮さと壮大さが浮き出る。

優勝したのに、馬を奪われ傷を負って帰ってきたスーホー。看病をするおばあさんとスーホーの場面は、地が真っ黒で、ふたりの姿は青い線のみで画かれ、ストーリーを追う文字は白い。地が黒いのはこのページのみである。白い馬を失ったスーホーの悲しみの深さが伝わってくるようだ。

スーホーが矢を抜いたときの、「きずくちからは、ちがふきだしました」の表現は、読み手聞き手も同じ痛みを感じる。

そして白い馬の死。

「白馬、ぼくの白馬。死なないでくれ」
「でも白馬は、よわりはてていました。
いきは、だんだんほそくなり、目の光りもきえていきました。
つぎの日、白馬は死んでしまいました」

ここで、白い馬の死という残酷で悲しい現実に向きあうことになる。

本書の対象年齢が「読んであげるなら 4 歳から」となっているが、もし 4 歳の子がこの話を聞いたとき、死とは何かを知ったり自分の頭で考えたりできるとは思わない。Nagy の理論に従えば、「ペットの電池が切れたこととの区別ができない」年齢から「人は死んだら生き返らない」とわかる年齢への移行期に相当しはじめる頃である。しかし、スーホーの悲しみはただごとではない。これはとっても大変で悲しいことなんだという認識は残るだろう。

「自分で読むなら小学校中級」の示唆通り、小学校 3，4 年あたりに自分で読めば、死の普遍性・絶対性を受け入れるのにちょうど良い年齢になる。子どもによっては近しい人の死に接した現実的体験をすでに持っているかもしれない。幼児期に触れた「白い馬が死んじゃった」というお話は、成長とともに子どもが生と死の尊さを奥深いところで理解する手がかり

になるに違いない。

この絵本には続きがある。夢に出て来た白い馬はスーホーにこのように告げる。

「そんなに、かなしまないでください。それより、
わたしのほねや、かわや、すじやけを使って、がっきを
作ってください。そうすれば、わたしはいつまでも、
あなたのそばにいられます。
あなたを、なぐさめてあげられます」

夢の中で、こう言いながらスーホーにからだをすりよせる。

スーホーは、白い馬に言われたとおりに、馬のからだを使って楽器を作る。できた楽器が馬頭琴。耳慣れないこの楽器の名前や、冒頭ではわからなかったことがここに来てきちんと理解ができる。

スーホーはどこに行くにもこの楽器を持っていく。

「それをひくたびに、スーホーは、白馬をころされたくやしさや、
白馬に乗って草原をかけまわった楽しさを、思い出しました。
そしてスーホーは、じぶんのすぐわきに、
白馬がいるような、気がしました。
そんなとき、がっきの音は、ますますうつくしくひびき、
聞く人の心を、ゆりうごかすのでした」

と締めくくって終わる。

読み手聞き手はスーホーとともに、白い馬からできた楽器を奏で、白い馬との思い出に浸り、一緒に悲しみを越えていく。ここには、今でいうところのグリーフケアがある。

今回改めて、いわゆる古典的絵本には死や残酷な場面がほとんど登場しないことがわかった。松岡氏は、幼い子どもが最初にふれる本は、人生に対して肯定的で、日なたのあたたかさと明るさを備えていなければいけないと述べている一方で、おしまいがハッピーエンドでおわればそれでよしとするような安易な考え方も否定する[5)]。

なぜ、長い間日本の絵本には、生や死をテーマにした絵本が存在しなかったのか。

これにはどのような歴史的背景があるのだろうか。筆者は、その理由と背景について、ふたつの要因をあげることができると考える。そのひとつは、近代日本の教育のあり方である。

4.「死」を避けてきた絵本

4-1.死や残酷な描写が少ない理由その１-近代日本の政策的教育

近代における日本の絵本や子ども向け図書の普及は、明治時代から本格化してくる。明治5年に学制が頒布され、明治23年には大日本帝国における国民道徳の基本と教育の根本理念を明示するための教育勅語が発布された。鎖国を解いた新政府が、将来を担う児童の教育の近代化政策に乗り出した時代である。国家の理念を反映させるように、明治時代以降、海外児童文学や各国の神話が次々に翻訳・紹介されていく[6)]。

日本人にお馴染みのグリム童話が日本に紹介されたのは明治19年、2005年のグリム童話翻訳年表によれば、「羊飼いの童」（KHM152 ）が最初である。[7)]。以後、グリム童話は少

年少女向けの雑誌に紹介され、明治期だけで、その翻訳や翻案は雑誌と単行本合わせて 64 本にも及ぶ[8)]。

明治期には、国の独自性・独立性を示そうとの意気込みから、グリム童話に代表される海外児童文学を道徳的教材にすべく力が働き、かなり自由に、思うままに改変されてきた歴史がある。

大正時代に「教育的応用を主とした童話の研究」を著した蘆谷重常は、教育的童話の条件として８項目を挙げている。例えば（２）として、「その材料が教育的に有害なものであってはならない」としたうえで、「残酷或いは野卑、或いは粗暴、或いは利己」などの悪徳なものは不適当であるとした。また（５）には「その言語が洗練された美しき言葉でなければならぬ、下等な卑野な、或いは不完全な言葉ではいけない」としている。さらにお伽噺で避けなければならない材料の例として「兄弟喧嘩」「非常に残酷な行為」「継子虐め」「盗賊」「詐欺」などを挙げている[9)]。

昭和に入ると、「グリム童話全集」5 巻が出版され、さらに幼児を対象にした絵本として登場するようになるが、この時期の絵本には、性的な描写をカットしたり話を簡略化したりする傾向があった[10)]。

例えば、「白雪姫」（KHM53）。そのストーリーは誰もが知るところであるが、ラストシーンはしばしば改変されてきた。もともとのお話では、最後継母は「女王は（仕方なく）真っ赤に焼けた鉄の靴を履き、踊り続けているうちに、とうとう地べたに倒れて死んでしまいました」となっているが、日本語版ではそのような結末ではないことが見受けられ、女王の最後には触れていなかったり、別の表現になっていたりする。ここには、恐ろしい罰の場面を意識的に避け[11)]、物語全体を道徳的教訓として子どもらに伝えようとする訳者や制作者の意図がうかがえる。

近年になってもその傾向が大きく変わったとは思われない。

1998 年に日本で発表され人気を得た「葉っぱのフレディ」は、「The Fall of Freddie the Leaf」が原題である。原著と日本語版を比較し、「死」という言葉の数の差を調べた古市らによれば、「死」の言葉の数の差は日本語では 7 箇所 6 文章、英語の「die と death」 は 9 箇所 9 文章。英語の「die と death」を「いなくなる・引っ越す・いやだ」と言い換えて、直接死ぬという言葉を避けている、と指摘する[12)]。古市らはこれを宗教の違いに基づく子どもたちへの配慮ゆえと結論づけているが、筆者は、明治時代から連綿と続く、日本語翻訳におけるやや過剰までの原文の書き換えを良しとする、無意識的習慣のひとつではないかと考える。

佐野洋子氏は、日本語の「メルヘン」に違和感を覚え、自身は決して使わなかったというが、その理由として、

「子どもの情操教育に血道をあげ、残酷、老い、死などを子どもの目に触れないよう細心の努力を払い、思いやりをお経の様にとなえる。一切の悪を悪という一色の認識に盛り込み、虫をつぶすことにすら顔色を変えるようになる。そして、グリム童話の血なまぐさい部分を変更せずにはいられないのである」とし、そこに悪意のないこと、純粋な愛情にあふれていることが、日本語の「メルヘン」と地続きのようで使う気にならない、と述べている[13)]。

4-2.死や残酷な描写が少ない理由その 2–死を隠してきた国民性

子ども向け図書に、死や残酷な描写が少ない理由のふたつめは、死を隠そうとしてきた国民性にあると考える[14]。

歴史的な視点で健康をとらえた小説や学術書を数多く著している篠田達明は、日本人が死ぬことから疎遠になり、死をなおざりにするようになった理由を 6 つにまとめている。以下はその要点である。

1．寿命が著しく延び、在宅死より病院や施設で死を迎えることが増えた。
2．日本人は現実を重んじ、今を生きること、楽しむことを優先とする。死を考えるのは面倒だし、そんなことで頭を悩ませたくない。「明日をわずらうことなくやりすごそう」がモットーである。
3．桜のようにパッと咲き、パッと散る情念を好み、物事を継続的にねばりづよく熟考する習慣がない。死ぬときもピンピンしていてコロッと逝くことを期待するだけで、具体的にはどうなるかを掘りさげようとしない。
4．昔から臭いものに蓋をする習性があり、本物の死は醜く恐ろしいものとして目の前から覆い隠した。人は死を直視してはじめて生の意味を悟るのだが、現代社会もなお死を隠蔽して死者の姿をさらさない。
5．新しがり屋で、歴史を大事にせず、先人たちの含蓄ある死生観をお蔵入りさせてかえりみなかった。
6．熟しやすく冷めやすい国民性と野次馬根性からつぎつぎに起こる事象に目を奪われ、優れたものでも評判にならなければ、目もくれない。

1の寿命の延伸と在宅死の減少については、すでにいくつかの統計が示す通りである。2については、個人差はあると思うものの、そういった傾向があることは否定できない。また、3は、桜を愛でた西行の和歌にもあるように、短命ゆえに美しい桜は日本人の精神のよりどころかもしれない[15]。ピンピンコロリを願っても、そのような最期を遂げるために生活習慣を変えるということにはつながらないのも確かである。4，5，6いずれも思い当たる節があり、結果的に、私たち日本人が死を遠ざけたり真正面から向き合ってこなかったりしたのは事実であり、それこそが日本人の国民性であると指摘されても、反論は難しい。

特に4に示されたように、死を直視しない国民性が子どもに与える絵本にも何等かの影響を及ぼしてきたであろうことは、想像に難くない。

死を隠そうとするのは、日本だけに限ったことではない。

1965 年に『死と悲しみの死生学』を著したイギリスのジェファリー・ゴーラーは、第一次世界大戦当時、葬列に出くわすと、子どもたちがその場で目をつぶって死者を見送っていたという話を回想している[16]。つまり自然に黙祷するという行為によって、死という事実と向き合うとともに、人間の尊厳に触れる体験をしていたことになる。

自分もそのひとりだったゴーラーは、1960 年代に入ると状況が変わっているのを敏感に感じ取った。ゴーラーは、1963 年の調査によって、大人たちが死をどのように子どもに伝えたらいいか戸惑っている様子を明らかにしている[16]。つまり、平和を獲得した代償として、大人自身が死を日常から徐々に引き離していくことになり、それが引いては、子どもたちと死との触れ合いの機会を閉ざすことになったといえる。

国が発展し、近代化が進めば進むほど、また健康政策が充実すればするほど、死のタブー化が進んでいくのは、古今東西共通の事象であるといえる。

このような背景の中で、『スーホーの白い馬』は出版され、国民の支持を得てきた。

その理由を探るために、論考を加えながらこの絵本の制作過程に着目していく。

4-3.『スーホーの白い馬』の成立まで

『スーホーの白い馬』を最初に日本に紹介したのは、児童文学者あり翻訳家でもある大塚勇三である。1967 年に出版された絵本に「大塚勇三再話」と紹介されている通りである。

そのきっかけは、福音館の編集長だった松居直氏の言葉であった。松居氏は、中国をはじめアジア各国の昔話を日本の子どもたちに紹介しなければという思いを持っていた。そこで大塚氏に、絵本をつくるためにモンゴルの昔話を訳して欲しい旨を依頼する。大塚氏が松居氏の要望に応えて日本に持ち帰ったのが、昔話というより伝説に近い「馬頭琴」という題名の話であり [17]、これがのちに『スーホーの白い馬』のタイトルで絵本として出版されることとなる。

その少し前、松居氏は 1960 年ごろに画家の赤羽末吉氏と出会い、絵本の「かざじぞう」を作りあげていた。松居氏は、当時新人画家であった赤羽氏の絵を大変気に入っていた。物語の読み取り方の確かさと表現の豊かさ、絵本を構成する力の大きさに強烈な印象を持った、と述べている [17]。

「かさじぞう」のあと、松居氏が赤羽氏と次の作品は何にするかで話し合ったとき、赤羽氏が戦争中旧満州に住んでいたことを知る。赤羽氏は、いわゆる引揚げ者のひとりであった。特に内モンゴルや中国の影絵芝居に興味があると赤羽氏が松居氏に語っている [17]。

そんな折、大塚氏が「馬頭琴」の話を持って来た。早速、赤羽氏にストーリーを渡し、当時は異例ともいえる大判横長の『スーホーの白い馬』が出来上がったのが 1967 年のことであった。

内モンゴル自治区で生まれたミンガド・ボラグによれば [18]、最初に赤羽氏から松居氏に「モンゴルのものが書きたい」という申し入れがあり、松居氏の「中国をはじめアジア各国の昔話を日本の子どもたちに紹介したい」との願いと重なり、大塚氏に依頼、大塚氏は松居氏の思いを受けて、この原稿が誕生したということになる。その意味では『スーホーの白い馬』の生みの親は、再話者の大塚氏でも、福音館書店の松居氏でもなく、絵を描いた赤羽氏であるという見方ができる。

赤羽氏は、「私はいつか蒙古を舞台にした大作を書きたいと思い、少しおおげさに言えば命がけで禁じられていたスケッチや写真資料をひそかに（日本に）持ちかえった」と回想している。それは、「あらゆることにすぐれている日本人にたったひとつ欠けていたものであるスケール」への挑戦でもあった [19]。

では、大塚氏はどこから「馬頭琴」を入手したのか。

この点について、ミンガドは精力的に取材を続け、1932 年に河北省で生まれた寒野（本名は楊蔭林、寒野はペンネーム）によるものであること、寒野はこの話を一人の年老いたモンゴル人から聞いたことを突き止めている [18]。

いわゆる、古典的絵本 61 冊の中で「生と死」を主なテーマに取り上げているものがわずかこの 1 冊だったことは驚きであったが、これは、編集者、児童文学作家、絵本画家のそれ

ぞれの思いが偶然の出会いによって結実したのであり、死生観という概念を意識的に組み入れたというわけではなかったということになる。

それでも、スーホーと白い馬をめぐるこの物語は、教材としても導入され、広い支持を得てきた。その理由を考察してみたい。

4-4.「馬頭琴」の再話

大塚勇三氏は、松居直氏に依頼され、モンゴルに伝わる民話を中国の寒野の作品「馬頭琴」で知り、これを紹介した。最初に人々の目に触れたのは「月刊絵本こどものとも」（1961 年 10 月）に『スーホーのしろいうま』（以下、≪こどものとも≫）として掲載されたときである。その際に、大塚は「この物語は、モンゴルの民話を幼年向けに再話した」と記している通り、原話と≪こどものとも≫の内容はところどころ異なっている。

それが、1967 年の絵本『スーホーの白い馬』（以下、≪絵本≫）では、むしろ原話に比較的忠実に改変されている。これは、読者を就学期と想定したことが前提であるが、結果的により躍動的で情感豊かな仕上がりになっている。

呉羽は、この 3 者（原話・こどものとも・絵本）を比較し、絵本が最も原話に忠実であることを示している [21)]。

例えば、競馬で優勝したのに殿様から 3 枚の銀貨を与えられ白い馬を置いていくよう命じられたとき、≪こどものとも≫では、「スーホーはびっくりして」となっているが、≪絵本≫では「スーホーはカーッとなって」とあり、こちらの方が原話に近く、スーホーの正義感を際立たせている。

また、≪絵本≫の、「きずぐちからは、ちがふきだしました」の記述も、原話にはあるが≪こどものとも≫にはない。呉羽はこれを、残酷な場面の想像を避けようとしたものとして削除されたのだろう、とみる。

「おうさまはどなりました」≪こどものとも≫は、「おうさまは　どなりちらしました」≪絵本≫に変わり、物語が馬頭琴の由来であることやモンゴルの壮大な自然をそのまま描いたことなど、≪こどものとも≫では削除された箇所を≪絵本≫ではほぼ復活させている。

ほかにも、殿様の動作について「おおいばりで」とか「どっかりこしをおろしていました」などの表現は≪こどものとも≫にはみられず、原話にそった文章が≪絵本≫で加筆されたことにより、殿様の横柄な態度が、のちのスーホーのくやしさを倍増させることになっている。全体に、権力に抑圧された民の声なき声が聞こえてくるようで、日本で勧善懲悪が好まれる心境 [22)] と通じるものがある。

幼児期という対象者を念頭において改変されたものより、原話に忠実な 1967 年版の絵本のほうが、読み手に深い感動を与えることとなった。結果として、それが日本人の精神性にうまくマッチし、広い読者層を獲得し、この絵本が永く読み継がれていくことにつながったといえる。

5.現代絵本の選定

5-1.「死と向き合う絵本」の増加

海外の翻訳ものや日本の絵本に死が登場し始めるのは、1970 年代以降である。死をテーマにした本の出版数は表 2 表 1 のように確実に増えている。

表 1.

年代	冊数
1970 年代	2
1980 年代	6
1990 年代	16
2000 年代	34
2010 年代以降	23

＊絵本ナビ[23]による「『死』と向き合う絵本」81 冊を分類し作成

死と向き合う絵本を具体的に調べてみた。表 1 と同じく、「絵本ナビ」（1900 万人の絵本ためしよみサイト）が紹介する、「死と向き合う絵本」を分析したところ、以下の絵本が登場する。

人気順・上位 10 位までを表 2. に示す。

No.	タイトル	作者	発行年
1	100 万回生きたねこ	佐野洋子（作・絵）	1977 年
2	わすれられないおくりもの	スーザン・バーレイ（作・絵）	1986 年
3	ずーっとずっとだいすきだよ	ハンス・ウィルヘルム（作・絵）	1988 年
4	やさしいライオン	やなせたかし（作・絵）	1982 年
5	おじいちゃんがおばけになった	キム・フォップス・オーカソ（作） エヴァ・エリクソン（絵）	2005 年
6	おじいちゃんのごくらくごくらく	西本鶏介（作）長谷川義史（絵）	2006 年
7	だいじょうぶだよ　ゾウさん	ローレンス・ブルギニョン（作） ヴァレリー・ダール（絵）	2005 年
8	くまとやまねこ	湯本香樹実（作）酒井駒子（絵）	2008 年
9	いつもだれかが…	ユッタ・バウアー（作・絵）	2002 年
10	てんごくのおとうちゃん	長谷川義史（作・絵）	2008 年

以上の出版年代をみていくと、1970 年代に刊行されたものが 1 冊、1980 年代が 3 冊、2000 年代が 6 冊であった。

これらの中には、幼児対象であり、かつ大人向けの絵本として認識されているものもある。ちなみに、1 位の『100 万回生きたねこ』や 8 位の『くまとやまねこ』がそれにあたり、いずれも対象年齢が記載されていない。

（5-1. 分担:山本直子）

5-2.死をテーマとする絵本が増えた理由と背景

このように、特に1990年代以降「死」を取り上げる絵本の出版数が増加した理由については、次のふたつの要因が考えられる。

ひとつは、地価の下落がはじまった、つまりバブル崩壊の年が1991年であったことが関係している可能性である。この年1991年の自殺者数は1万9,875人であったが、1998年には前年の2万3,494人から8,261人（35.2%）増加し3万1,755人にのぼっている。以後2010年までは毎年3万人以上の自殺者が報告され、社会問題として取り上げられた。厚労省によれば[24]、1998年の自殺者急増はバブル崩壊によるものとされている。みずから命を絶つ人が増えることを社会全体が憂え、命の大切さに真正面から向き合おうとする風潮が絵本にも反映されているのではないだろうか。

ふたつめは、いわゆる「子どもの自殺」や「子どもによる殺人」の表出と社会問題化である。

「子ども」の定義は学術分野によって若干の相違があるが、統計上「子ども」「児童・生徒」というとき、それは小・中・高校生を意味することが多い。

上述のように、1998年に年間自殺者数が3万人に達し、そののち10年間にわたって同等数の自殺者数をみてきた。また、1979年には、いわゆる「いじめ自殺」がはじめて報道され、以後、中・高校生の自殺が注目を集めてきた。文部科学省が小学生の自殺統計を取り始めたのは1977年、この年は小学生の自殺が10件あったとされる[24]。

統計はとってみたものの、この間、学校における自殺予防教育は全くといってよいほど行われていなかった。文科省が「児童生徒の自殺予防に向けた取組に関する検討会」を設けたのは2006年のことであり、2007年には「子どもの自殺予防のための取組に向けて（第1次報告）」が報告された[25]。しかし、2020年の小・中・高校生の自殺者数が、統計を取り始めてから、過去最高の400人を超える[26]など、相変わらず子どもたちの自殺は減少の兆しを見せておらず、国の自殺予防対策が十分な成果をあげているとは言い難い。

「死にたいと思ったことがある」という子どもは、小学生の高学年から増え始め、低くみても中・高校生では2〜3割に達するという報告もある[27]。思春期・青年期の子どもたちの自殺は、この時期真剣に生きることを考え始めるからこそ、その裏返しとして死が頭をよぎり、希死念慮も高まることが一要因となっていると考えられる。

また、長崎県教育委員会による「児童生徒の『生と死のイメージ』に関する意識調査」をみると、10%前後の子どもたちが「人は死んでも生き返る」と考え、中学生でも「人は死なない」ととらえる子どもがいることがわかった[28]。

子どもによっては、人生は一度限りであり死は避けられないものであるという認識が十分に育っていないと考えられる。

子どもの自殺と同時に、社会に衝撃を与えたのは、子どもの手による殺人事件である。

2004年6月、長崎県佐世保市で小学6年生の女子児童が教室内で同級生の首をカッターで切りつけ死に至らしめた事件があった。この事件は大きく報道されるとともに、学校関係者のみならず社会を震撼させ、「こころの教育」あるいは「いのちの教育」の必要性と徹底が叫ばれた[29]。いのちを大切にしようという教育は、それまでも行われてきたが、佐世保事件は従来の教育の不徹底さや不十分さを露呈する形となった。

なぜ「こころの教育」「いのちの教育」が充実してこなかったのか。

杉山 [30]は、それまでの教育が、「生きることのすばらしさ」やその「尊さ・大切さ」等を情緒主義的・道徳主義的に考えようとしてきた、つまり「生」の部分に焦点をあててきた傾向があった、と分析する。

さらに、「生」からいのちを視ることに重点がおかれるあまり、「死」について考えたり向き合ったりすることは意識的に避けられてきたのではないか、と指摘し、「いのちの教育」によっていのちを考えさせるのであれば、生と表裏一体である死の視点からいのちを視る視座が不可欠である、とも述べている。

以上のように、小学生を含む子どもの自殺、子どもによる殺人事件という、歴史上遭遇してこなかった重い現実が、命や死をテーマにした授業や教材や書籍の需要につながり、おのずとそれらが受容されていったのだと推察できる。

4-3.現代の絵本−100 万回生きたねこ

さて、現代絵本の中で「死と向き合う」絵本としてトップに挙げられた「100 万回生きたねこ」のストーリーを簡潔に紹介する。

冒頭は、こんな風に始まる。

「100 万年も　しない　ねこが　いました。
100 万回も　しんで、100 万回も　生きたのです。
りっぱな　とらねこでした。
100 万人の　人が、　そのねこを　かわいがり、　100 万人の
人が、そのねこが　しんだとき　なきました。
ねこは　1 回も　なきませんでした」

そして、最初は王さまのねこでした、と続いていく。

「あるとき、ねこは　王さまの　ねこでした。ねこは、
王さまなんか　きらいでした。
王さまは　せんそうが　じょうずで、いつも　せんそうを
していました。そして、ねこを　りっぱな　かごに　いれて、
せんそうに　つれていきました。
ある日、ねこは　とんできた　やに　あたって、
しんでしまいました。
王さまは、たたかいの　まっさいちゅうに、ねこを
だいて　なきました。
王さまは、せんそうを　やめて、おしろに、帰って
きました。　そして、おしろの　にわに　ねこを　うめました」

次には船のり、そしてサーカスの手品つかい、どろぼうやひとりぼっちのおばあさん、小さな女の子にかわれていくが、その都度死んでゆく、と話が続く。どろぼうから以後は、「きらいでした」から「だいきらいでした」になっていく。ねこが人間にかわれることにうんざりしているかのようである。

ある日、ねこは誰のものでもなくなる。そのときの様子は

「ねこは　はじめて　自分の　ねこに　なりました。
ねこは　自分がだいすきでした」

と綴られ、のびのびしたねこの姿が描かれている。

100 万回も生きて 100 万回も死んだことを皆に自慢し、皆の羨望を集めて得意げになるねこの姿がそこにあった。めすねこにも、モテて仕方がない。

「おれは　100 万回も　しんだんだぜ。いまさら　おっかしくて。
ねこは、だれよりも　自分が　すきだったのです」

ところが、一匹の白いねこだけはそんなことに興味を示さない。いつも素っ気ない態度でのらねこの自慢話を聞き流している。そんな白いねこに魅かれたのらねこは、白いねこと一緒に過ごすことを決める。

年月が経ち、たくさんの子ねこがうまれ、そして巣立っていく。これまでにない幸せを感じるのらねこ。

「ねこは、もう、「おれは、100 万回も…」
とは、　けっして　いいませんでした。
ねこは、白いねこと　たくさんの　子ねこを、
自分よりも　すきなくらいでした」

少し老いた白いねこを見る目はとてもやさしい。ねこは、白いねこといつまでも生きていたいと思うようになる。

しかし、ある日、白いねこは動かなくなっていた。

「ねこは、はじめて　なきました。」

夜も朝も、次の夜も朝も泣き続けるのらねこ。二度と目を覚まさない白いねこ。

最後はこのように締めくくられている。

「朝になって、夜になって、
ある日の　お昼に、ねこは　なきやみました。
ねこは、白いねこの　となりで、
しずかに　うごかなくなりました。

ねこは　もう、けっして　生きかえりませんでした」

最後、白いねこを抱いて泣き叫ぶのらねこの姿は秀逸である。

作者の佐野洋子氏は 1938 年生まれ。武蔵野美術大学、ベルリン造形大学に学び、多くの絵本を創るほか、エッセイや小説、対談集も多数ある [31)]。

この絵本を書いた動機について、佐野は NHK のインタビュー[32)]でこのように答えている。

「ねこは一回しか生きなかった。どんな人も一回しか生きない。そんな平凡なことこそが大事だと言いたかった。人はただ一回生きて、人を愛して、死んでいけばそれだけでいい。

非常に簡単なメッセージだと思う」

また、この物語の原点には大好きだった兄の死が深く根付いている。同じインタビューで佐野は兄のことをこう語る。

「兄ほど好きだった男はいない。あんなに気持ちが通じ合う人は他に出会ったことがない」

8 歳のときに 12 歳で亡くなった病弱の兄。恋をすることも知らずに死んだ兄の一生を思うと無念で兄がかわいそうでならなかったし、かけがえのない人が奪われ失われることがあるのだという現実を教えてくれた、と話している。

6. まとめと考察

6-1.古典的絵本と現代絵本

『スーホーの白い馬』は、松岡氏みずからが古典と呼ぶ 61 冊の中で、唯一死が登場する絵本であった。明治以来、残酷な場面や死をできるだけ回避してきた傾向のある日本で、この絵本は原話に忠実であったことが、かえって日本人の精神性にマッチし、人々の情緒の育成や死生観に何等かの影響を与え続けてきたと推測できる。

しかしながら、その成立過程を振り返ると、そこには人々の死生観をはぐくむ意図は感じられない。古典的絵本には、死と向き合う内容の絵本はほとんどないと言える。

一方、近代絵本の中で取り上げた「100 万回生きたねこ」は、1977 年出版以来版を重ねているベストセラーである [31]。作者の佐野は、幼い頃に兄を喪った体験がこの本の原点にあると述べている。佐野の死生観が絵本という形で表現され、それが広い世代に受け入れられているのだと考える。単に読んで感動する絵本というだけではなく、教材としても活用されている。

教員養成課程大学生を対象にした藤野の研究によると [33]、この絵本について議論の時間を持つことは普段は遠いところにある死の具体的なイメージにつながり、死について考えることは生きることを考えることにもなると実感させ、また教材として活用することで子どもたちの死生観形成に役立つと結論づけている。

生と死に真正面から向き合った 2 つの絵本。そのひとつである古典的絵本は意図的ではく、もうひとつの現代絵本は作者の死生観が原点となっている。その成立過程に根本的な違いはあるにしろ、教科書に採用されたり死生観の講義に使われたり、一定の人気を維持してきた理由にいくつかの共通点が認められた。以下がその 5 点である。

1）絵が魅力的・印象的である。
2）死を隠さずに描いている。
3）死を悲しむ過程を描いている。
4）死という悲しみを超えた活力が物語にある。
5）登場人物の感情が豊かに描かれている。

6-2.絵本のちから

子どもは個体差や環境の違いはあるものの、生後 10 か月ころから絵本がそばにあれば「絵本」というものに興味を示すという [34]。

もちろん、字も読めず内容を理解するわけではなく、おもちゃに近い存在としての「絵本」

である。つまり、絵の描いてある四角いものが目にとまる、手でめくると違った絵があらわれる、さらに別のところをひらくとまた違った絵があらわれるという発見と繰り返しの楽しさ。手を使うという自発的能動的な動作は子どもの成長過程に欠かせない動作であり、松居は、絵本は手を使って見るのだというところに、本と人間のかかわりの仕方の価値の第一歩があると述べている。

絵本は絵を見て、あるいは読み聞かせによって楽しむもの、と定義するなら、絵本を用いて生と死を教訓的に教えるということについては異論があるだろう。

松居は、子ども大人にかぎらず、絵本は読み聞かせるものだと一貫して推奨し、また、河合は、いい本とか、ためになる本とか、子どもに対して押しつけがましい魂胆があるのはよくないと述べている[34]。

一方で柳田は、両者の意見を尊重しつつ、小児病棟のプレイルームなどの書架に、様々な楽しい本と一緒に「いのち」や「死別」「喪失」について語っている絵本（おじいさんが亡くなる話や動物同士の別れなど）が 100 冊くらい意識的に並べられていることがある。それを読んでどう思うかは、人それぞれだが、子どもや親が自由にそれを手に取るという選択の仕方に任せている、という話を紹介している。このようにあえて死を扱った本を置くのは、難病やがんなど長期入院となった子どもやお母さん方にとってどんな情報環境がいいのだろうと小児科の医師たちが考えた結果だという[34]。この点については、松居・河合ともに、「さりげなく置いてある」ことには前向きな考えを示している。絵本と出会うきっかけや環境づくりは、積極的に進めたが方がいいということだろう。

学校で教える題材として、死をとりあげ、いわゆる「こころの教育」や「いのちの教育」を展開することに異議はない。しかし、死生観確立の萌芽がすでに幼児期に始まっていることを前提とすれば、学校教育以前に絵本によっていのちの大切さを感じることの必要性はもっと認識されてもいいのではないだろうか。

アニミズム的な世界観を持っている幼児期、死の不可逆性に気づく児童期、死の普遍性、不動性を認識する小学校高学年から中学生、それぞれの発達過程に沿って死生の意味を伝達する姿勢がおとなには求められる。しかし、そこには「レディネス（準備期間）」が重要である[35]。その「レディネス」こそが学校教育以前の幼児期に相当するといえるのではないだろうか。

絵本によって感覚として受け止める生と死の物語は、幼児期の子どもの情緒や心の豊さを土壌とし、最初は潜在的に、やがて成長とともに個々の心に刻み込まれ、子どもの人生に彩りを添えるとともに、バランスの取れた死生観の確立に寄与するものと考える。

河合は、子どもの自殺や子どもの手による残酷な事件の背景には、人生が一度きりであるという認識が育っていないことがあるとした上で、「死を遠ざけるのではなく、豊かな死のイメージが現実の死を防ぐことができる」という観点から生や死の教育を行うことが大切だと述べている[36]。

絵本を選ぶ立場にあるおとなの役割は重要である。同時に、絵本を選び語るおとなの死生観が必然的に問われていくことになる。むしろ、死を遠ざけてきた日本において、おとなの死生観の未熟さが露呈することも考慮しなければならない。今回幼児期を念頭に置いて望ましい絵本について論考してきたものの、それに伴っておとなの死生観こそが問われているのだといえる。

絵本を見極める視点、時代に翻弄されない活力ある絵本を取捨選択していく勇気。そういった観点からみて、提示した『スーホーの白い馬』と『100 万回生きたねこ』の共通項を見出した。絵本を選択する際の必要条件を提示するまでには至らなかったが、両者の共通項を吟味する作業を続けるとともに、絵本がすべての人の死生観形成に寄与することを実証する研究を加えていきたいと考えている。

引用文献

1）緒方紀子　西田三十一（2017）：幼児の死生観の形成に影響する要因に関する文献研究　聖徳大学研究紀要　第 28 号　143-149
2）アルフォンス・デーケン（2001）：生と死の教育（シリーズ教育の挑戦）岩波書店　114-116
3）松岡享子（2017）：えほんのせかい　こどものせかい　文春文庫　227-228
4）同上:32
5）同上：85
6）山田史子（2004）：日本におけるグリム・メルヘン受容　慶應義塾大学研究年報　No.21　60-82
7）川戸道昭・榊原貴教編（2005 年）：児童文学翻訳作品総覧　第 4 巻(フランス・ドイツ編 2)ナダ出版センター
グリム童話の初出については、現在も資料発掘が進んでいる
8）須田康之（1991）：グリム童話における受容と変容　教育社会学研究集第 49 集　118
9）蘆谷重常（1913）：教育的応用を主とした童話の研究　勧業書院　71-79
10）8）と同じ：119
11）野村泫（1997）：昔話は残酷か　東京子ども図書館　10-12
野村は、この本のなかで、なぜ昔話に残酷な場面が多いか、について民芸学・民俗学・心理学の立場から解説をしている。
12）古市久子　西崎有多子（2009）：絵本の翻訳に何が影響しているか-日英の絵本を通して　東邦学紙 38　1 号　41
13）佐野洋子（2020）：私はそうは思わない　筑摩 eBOOKS　272/2915
14）篠田達明（2008）：戦国武将の死生観　新潮選書　234-235
15）立川昭二（2015）：日本人の死生観　028-046
16）植田美津恵（2019）：東京通信大学紀要　第 2 号　95
17）松居直（2009）：「絵本をみる眼」新装版第 2 刷　エディター叢書　122-123
18）ミンガド・ボラグ（2021）：日本人が知らない「ス―ホーの白い馬」の真実　扶桑社新書　49
19）同上：50
20）17）と同じ：135
21）呉羽長（1990）：「ス―ホーの白い馬」の教材論的考察　富山大学教育実践研究指導センター紀要　No.6 67-78
22）常盤木（2000）：勧善懲悪の希求　　林業経済 53 巻　7 号　i-i
23）「絵本ナビ」は、参加型の絵本・児童書情報サイト　https://www.ehonnavi.net/

24）内閣府（2017）:自殺対策白書第 1 章　自殺の現状　2－4
25）武田さち子（2017）: 文部科学省発表資料参考に作成
201705 kodomo no jisatsu hyou.pdf (apc.org)
26）NHKWEB（2021）: 10 月 13 日、NHKWEB では、文科省の調査結果を発表
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211013/k10013305371000.html
27）文科省・児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議（2009）: 教師が知っておきたい子どもの自殺予防第 1 章子どもの自殺の実態　1-4
28）新井肇 (2021) :第 5 回自殺総合対策の推進に関する有識者会議 (ヒアリング資料 1)
5
29）長崎件佐世保市の事件を受けて、「命を大切にする教育」をどう進めるか―「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」の検討(2005 年)が有村久春編集によって発刊された
30）杉山緑（2004）:「いのちの教育」の検討　山口大学教育学部論叢（第 3 部）54 巻
55-65
31）佐野洋子（1977）: 100 万回生きたねこ　講談社　2019 年は 117 刷である
32）あの人に会いたい : NHK アーカイブス　No.276
https://www.nhk.or.jp/archives/people/detail.html?id=D0009250276_00000
33）藤野彰子（2015）: 教員養成課程大学生の死生観に関する検討-童話 100 万回生きたねこを教材として-　女子栄養大学教育学研究室紀要 12　94-99
34）河合隼雄、松居直、柳田邦男（2001）: 絵本の力　岩波書店
35）碓井真史 (2005) : 子どもの死生観の理解と指導　有村久春編「命を大切にする教育」をどう進めるか―「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」の検討　教育開発研究所
36)27）と同じ

植田 美津恵（うえだ みつえ）　東京通信大学 人間福祉学部 准教授
山本 直子（やまもと なおこ）　愛知淑徳大学 創造表現学部 非常勤講師